

# ギフチョウの食草カンアオイ属 Heterotropaの違による成長差

尾崎 勇

ギフチョウ *Luehdorfia Japonica* Leech の食草であるカンアオイ属は全国各地でくわしく調べられており、各地より多くの種が発表されている。その種類は産地により相違している。野外ではギフチョウはカンアオイ属なら、どの種でも食餌植物としていると言うわけではない。ギフチョウを産する地にはこのチョウの主要な食草である特定のカンアオイ属を食餌としている。

兵庫県内には4種のカンアオイ属 (*Heterotropa*) が分布しており、南部の淡路島 (先山) にナンカイアオイ (*H. nipponica* Var *nankaiense*)、東部にヒメカンアオイ (*H. takaoui* Var *takaoui*)、西部にミヤコアオイ (*H. aspera*)、北部にサンインカンアオイ (*H. nipponica* Var *saninense*) が生育している。

他に中央背山にフタバアオイ (*Asarum caulescens*) ウスバサイシン (*A. sieboldii*) が分布している。だがギフチョウの食餌食物とはなっていない。

5月13日孵化のヒメカンアオイ食ギフチョウを木村三郎氏より譲与され、1卵塊16頭の幼虫を栽培しているカンアオイ属で飼育して見た。栽培している種も数が少ないので各種2頭とした。兵庫県西脇市産ヒメカンアオイ、朝来郡生野町産サンインカンアオイ、淡路島先山産ナンカイアオイ、滋賀県武奈ガ岳産ミヤコアオイ、兵庫県相生市産ミヤコアオイ、鳥取県大山産ミヤコアオイ、長野県入笠山産ウスバサイシン、園芸店より入手したツクシアオイ? (*Asarum blumei*) を使用した。

飼育場所は屋内で、直射日光があたらない机上で行った。飼育器は径85%高さ25%のプラスチックのシャーレを使用した。5月13日に孵化後14日迄ヒメカンアオイを与え、15日以後は各種のカンアオイ属に切替えた。同時に朝来郡生野町で採卵されたサンインカンアオイ食のギフチョウも飼育した。

同ギフチョウは5月12日に7頭孵化した。同幼虫はヒメカンアオイで飼育した。5月14日~15日に孵化した幼虫は6頭で竜野市産ミヤコアオイで飼育した。

生野町で成虫の見られるのは、4月末より5月上旬で西脇市より20日程後れる。飼育に使用した卵は生野町在住の清水宏一君の発見された新産地のもので、同地で採集されたのは2令のみであるが、2令共に後翅

表1. ヒメカンアオイ食ギフチョウの飼育記録

食草	令数	1令	2令	3令	4令	5令	蛹	計
西脇市産 ヒメカンアオイ	5月 13日		17日	20日	24日	27日	6月 6日	24日
生野町産 サンインカンアオイ	5月 13日		17日	20日	25日	28日	6月 8日	26日
淡路島先山産 ナンカイアオイ	5月 13日		17日	21日	25日	28日	6月 8日	26日
滋賀県武奈ガ岳産 ミヤコアオイ	5月 13日		17日	20日	26日	29日	6月 9日	27日
相生市産 ミヤコアオイ	5月 13日		18日	22日	27日	31日	6月 15日	33日
鳥取県大山産 ミヤコアオイ	5月 13日		18日	21日	26日	29日	6月 11日	29日
長野県入笠山産 ウスバサイシン	5月 13日		17日	21日	25日	28日	6月 9日	27日
園芸店より入手 ツクシアオイ	5月 13日		17日	21日	25日	29日	6月 10日	28日

表2. サンインカンアオイ食ギフチョウの飼育記録

	1令	2令	3令	4令	5令	蛹化	計
西脇市産 ヒメカンアオイ	5月12日	5月18日	5月25日	5月30日	6月5日	6月14日	33日
竜野市産 ミヤコアオイ	5月12日	5月18日	5月26日	5月31日	6月7日	6月17日	36日
竜野市産 ミヤコアオイ	5月14日	5月20日	5月28日	6月4日	6月15日	6月25日	42日
竜野市産 ミヤコアオイ	5月15日	5月21日	5月28日	6月5日	6月17日	6月28日	45日

表面、肛角部の紅色紋が橙黄色になった個体で、私は検していないがヒメギフチョウによくにているそうである。早速同君に採集地を捜していただき採卵していただいた卵である。どのような成虫が羽化するか来年の春が楽しみである。

## 飼育の結果による考察

やはり飼育すると蛹化が早くなる。西脇市の野外では6月5日頃はほとんどの幼虫は3令で早いもので4令である。

サンインカンアオイとナンカイアオイで飼育したものは幼虫期間が26日で早い方である。サンインカンアオイは県北部の日本海側と中央山地の主要食草であるのでヒメカンアオイで飼育したものとほぼ同じような幼虫期間であったのは当然であるが、ギフチョウの食草となっていないナンカイアオイも同じ幼虫期間で蛹化したのには驚いた。やはり同じタイリンアオイ節だ

からなのだろうか。

同じミヤコアオイでも武奈ヶ岳産ではウスバサイシンで飼育したものと幼虫期間も同じであるが、相生市産のミヤコアオイで飼育したものでは相当日数もかっている。花は変らないが葉は武奈ヶ岳産では葉面の短毛が少ない。葉質は相生市産よりもやや薄く少し光沢がある。相生市産及び竜野市産のミヤコアオイは葉面に短毛を散生し、光沢がなく、葉質もやや厚い。日本海側のミヤコアオイと瀬戸内側のミヤコアオイは亜種ぐらいの違いがあるのかもしれない。

県北東部や鳥取県では食餌植物となっているのに、なぜ県南西部のミヤコアオイは野外での食草となっていないのだろうか？。1回や2回の比較飼育ぐらいでは結論は出ないが、南西部にギフチョウの発生を見ないのは幼虫の食付の悪さ、幼虫期間が長い上に蛹も他の種で飼育した蛹よりも小型である。このようなことも発生しえない原因の1つになっているものと考察する。

#### カンアオイの栽培種・古典植物細辛

カンアオイ属は北半球温帯・暖帯に約70種が自生しており、日本では本州北部から沖縄にかけて40種程がすみ分けている。

カンアオイの自生地は、木もれ日のさす林内の水はけのよい斜面で、根の先は土の中へ深く入り込んでいます。茎は地中を浅くはって、1年に1節ずつ伸びます。自生地は低山帯に多く、高山に生えている種はありません。たゞ1種ミヤマアオイだけは比較的高い北アルプスの登山口付近に自生しています。

カンアオイは本来、関東地方南部を中心に見る種類ですが、一般にはカントウカンアオイと呼ばれ、カンアオイと言うとカンアオイ40種程の仲間全体をさすのが普通です。

江戸時代の昔から伝統的にカンアオイを栽培している人達がいる。この人達の間では細辛(サイシン)常盤細辛、江戸細辛と呼ばれ、その母種はカントウカンアオイやスズカカンアオイです。

園芸家の間では特に葉柄の色がやかましい。普通私達が森で見る暗紫色の葉柄では汚れていると言ってきかれる。まず何よりも緑色の葉柄でなければならぬ。これを青軸と呼ぶ。黄色味を帯びたのを極黄と言って珍重される。葉の基部の両縁の耳状の部分が着物の襟を合せたように、左右が重なりあっているのを、襟合せとか蝶重ねが良いと言って合格点を与える。

細辛は花を楽しむと言うより、葉面の柄を中心に1年中変らない葉を観賞する植物です。江戸時代から明治・大正年代にかけて愛培され、その品種も100種前後知られていた様だが、そのほとんどが絶えてしまっているようです。

蝶と言うのは葉の基部の左右耳状の部分にある斑紋のことです。葉面に糊をつけたように薄く白く斑のように浮いて見えるのを糊と言ひ野生品にもよく見られます。葉の主脈にそって白斑の通っているのを一文字と言ひ、葉面にはいる斑によってアラレ斑・ゴマ斑・玉斑・虎斑などと呼ばれています。

フタバアオイも近年よく栽培されているのを見かける。1茎の先に葉が2枚づつあるので双葉葵の名がある。京都の加茂神社の祭礼に、このアオイが使われるので加茂葵の名もあります。又徳川家の紋章の3ツ葉葵もこれに基づいたものです。

花は淡紅紫色で径1センチ程で下向きになって開きます。花は葉の下にかくれ地際に咲くので上から見たのでは一寸見落します。鉢植にして横から眺めるとまことに良いものです。

ギフチョウ採集のひと時、青軸物や黄色の雲紋葉を捜してみませんか。

因みに山草家の間で栽培されている種を上げると、フタバアオイ節

フタバアオイ, *A, caulescens*

ウスバサイシン節

ウスバサイシン, *A, sieboldii*

カントウカンアオイ節

カンアオイ, *H, K, var nipponicum*

スズカカンアオイ, *H, K, var brachypodion*

ランヨウアオイ節

ツクシアオイ, *H, kiusianum*

ヤクシマカンアオイ, *H, yakusimense*

ヒメカンアオイ節

ミヤマアオイ, *H, t, var nakaii*

モエギカンアオイ, *H, t, var viridi*

コバノカンアオイ, *H, t, var variegatum*

ミヤコアオイ節

ツクバネアオイ, *H, a, var constrictum*

コバナカンアオイ, *H, a, var parviflorum*

ナンゴクアオイ, *H, a, var crassum*

(S. 26 : ISAMU OZAKI 明石市 )